

テーマ 連研ノートE〔改訂版〕について ― 変更のポイントとその意義 ―

1. 『連研ノートE』作成の経緯とねらい

(1) 『連研ノートE』作成（2014年3月31日発行）の背景と願い

【背景】

- 「基幹運動」と「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）の過渡期に作成された

基幹運動（同朋運動・門信徒会運動）から、2012年度に「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）へと教団の運動が転換するなかで、その両方をまたぐ2009年から2014年の5年の歳月を経て発刊された。

- 「連研」の内容そのものが変わってきた
（話し合い法座から講義形式（知識習得のため）の講座へ）

これまでお寺や宗教にあまり触れてこなかった門信徒の参加に伴い、「連研」に仏事作法を含む浄土真宗の基礎学習の要素が一層求められるようになってきた。

【願い】

- 時代の変化と受講者層の多様化に応じた新たなテーマを設定しつつ、これまで基幹運動が課題としてきた差別、ヤスクニ（非戦・平和）に代表される問題を、教えに生きようとする私たちの課題として継承し、取り組んでいくこと
- 話し合い法座を大切にすること
- 「実践運動」における「連研」と「門徒推進員」の位置づけと役割を明確にすること

『連研と門徒推進員の位置づけは、運動の名称が変わってもその意味が変わるものではありません。「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）は基幹運動がめざした宗門と寺院のあるべき姿をめざす目的を受け継ぐものです。そうした意味において、門徒推進員は単に教団や寺院を護る人ではなく、ともに変える人であると言えます』

（『連研ノートE ―スタッフノート―』2014年3月31日発行より）

(2) 『連研ノートE』の構成

- 12の問いを「起・承・転・結」の流れによって構成

問いの流れを目標に至るストーリー（道筋）に見立てる。

「自分の内面を掘り下げ → 自分と社会との関わりを確かめ → 課題と私の歩む方向を明らかにする」

「起」問い1～2 「承」問い3～6 「転」問い7～10 「結」問い11～12

○ 「起承転結」の過程をとおして

用意された答えを身につけていく（教えを知識として習得する）学びではなく、日常の具体的な問題について話し合い、聞き合い、受けとめ合うなかで、その本質的な課題と歩む方向を教えに問い聞いていく学びへ

○ サブテーマ（私の問い）について

4つの観点から設定

- ① 話し合いの糸口・呼び水として
- ② これまでの連研で出された意見の集約として
- ③ 受講者の視野を広げる役割として
- ④ 話し合いの中で直接触れられなくても、スタッフのまとめに入れておきたいテーマとして

2. 『連研ノートE [改訂版]』（改訂の経緯とねらい、使用上の課題）について

（1）『連研ノートE [改訂版]』作成（2020年3月31日発行）の背景

① 時代の宗教環境の変化

『連研ノートE』が2014年に発刊されてから今日までの間に、時代の宗教環境は大きく変わってきました。具体的には『家の宗教（慣習として信仰してきた教え）』の存続が行き詰まっていくなかで、墓じまいや、仏壇整理の増加となって寺檀関係の縮小が進んでいることです。この変化は以前より予測されていたことですが、私たちの教団をはじめとする伝統仏教教団のあり方を揺るがす問題として、急激に顕在化しつつあります」（『連研ノートE ースタッフノートー[別冊]』2021年3月31日発行より）

② ご親教「念仏者の生き方」の発布（2016年10月1日）

「このような変化を受け、私たちの教団では第25代専如門主伝灯奉告法要を契機として、ご親教『念仏者の生き方』が発布され、新たな時代へ向けた展望が示されました。今回の『連研ノートE』の改訂は、新たに発布されたご親教『念仏者の生き方』にもとづいて教団の教化活動全般が見直されるなかで『連研』の方向性を改めて位置づけたものです」（『連研ノートE ースタッフノートー [別冊]』より）

※ ご親教「念仏者の生き方」が提示されたことを受け、『「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）総合基本計画・重点プロジェクト』は、2018年度から「そのお心を体した内容に改定」され、今期（第4期2020年度～2023年度）の重点プロジェクトも前期（第3期2018～2019年度）と同様に「ご親教のお心を体した宗門全体の実践目標を定め、一体感を持って取り組む」こととなっている。教団全体の運動や組織運営の根底に「念仏者の生き方」を据えようとするなかで、「中央教修」、「連研」、そして『連研ノートE』に「念仏者の生き方」を反映させよ、との総局からの指示があったことが背景にあり、それが改訂の最大の理由であるといえる。

（2）『連研ノートE [改訂版]』の内容

① 『連研ノートE』からの変更箇所

I. 「私たちのちかい」についての親教を追加

Ⅱ. 「連研」のねらい（参加者の皆さんへ）に、ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ

〔講義概要〕についての項目と文章を追加

Ⅲ. ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ〔講義概要〕（一覧表と各回の講義概要）を追加

Ⅳ. Ⅰ 2の問いを一部変更

Ⅴ. 「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）総合基本計画・重点プロジェクトを更新

② Ⅰ 2の問い、サブテーマ（私の問い）の変更内容

（別紙：連研ノートE〔改訂版〕対比表 参照）

※ 今回の『連研ノートE』の改訂では、Ⅰ 2の問いそのものについては、【問い 12】を「念仏者の生き方とはどのような生き方なのでしょう」としたことが最大の変更点である。2018年4月に突如として聞こえてきた『連研ノートE』改訂の話だが、当初はⅠ 2の問い全体の構成を「念仏者の生き方」に基づいて抜本的に改定する案が連研ノート検討部会・事務局より提示された。具体的にはご親教「念仏者の生き方」に学ぶ①、②、③として【問い 1～3】のメインテーマに位置づけるというものであったが、連研・中央教修に関わる多くの研修講師から「連研の目的や話し合い法座の願いに反する」との声が上がり、阻止された。とはいえ、『連研ノートE』に「念仏者の生き方」を反映させよとの総局からの指示も無視できず、連研ノート検討部会で協議が重ねられた結果、Ⅰ 2の問いとは別に、基礎学習としてご親教「念仏者の生き方」から学ぶ〔講義概要〕を『連研ノートE〔改訂版〕』に追加することとなった。

③ 『連研ノートE〔改訂版〕』作成に伴う「連研」のカリキュラムの変更

内 容	時 間
1. 開会式 ～ お勤めの練習・作法	30分
2. ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ〔講義概要〕	30分
3. 問題提起(Ⅰ 2の問い)	30分
4. 話し合い法座	60分
5. まとめ ～ 閉会式	30～60分

※上記は、『連研ノートE〔改訂版〕』を元とした一例です。

（「門徒推進員養成連続研修会（連研）開催要項」2020年4月1日改訂）

(3) 『連研ノートE ―スタッフノート―〔別冊〕』（2021年3月31日発行）の内容

○ 目次と概要

I. 『連研ノートE ―スタッフノート―〔別冊〕』これがポイント！！

<特徴>

Ⅱ. 『連研ノートE』改訂の方向性 ～ご親教「念仏者の生き方」を体して～

☆『連研ノートE〔改訂版〕』は、ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ〔講義概要〕と

「話し合い法座」のためのノート！

☆『連研ノートE〔改訂版〕』を使っていただくためには、3種類必要！！

「参加者用」1種類と「スタッフ用」が2種類

スタッフは、参加者用（『連研ノートE〔改訂版〕』） + スタッフノート + スタッフノート〔別冊〕の3冊を用意してください。

<使用法>

Ⅲ. 「基礎学習」 ～ご親教「念仏者の生き方」をまず読んで！～

スタッフは、冊子『伝灯奉告法要ご親教「念仏者の生き方」に学ぶ』（本願寺出版社）の読み合わせをして、主旨をつかんでからはじめることをお勧めします。

また「連研」の初回には、ご親教「念仏者の生き方」を参加者と通読してください。

「私たちのちかい」の唱和もお勧めします。

①ご親教「念仏者の生き方」に学ぶ

ご親教を味わう留意点が述べられています。

②ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ

～基礎学習プログラムの実際について～

講義をするうえでの概要とキーワードが述べられています。

キーワードに合わせて『「念仏者の生き方」に学ぶ』と『僧侶教本A』（本願寺出版社）のページを掲載しておりますので参考資料としてご活用ください。

Ⅳ. 話し合い法座！ ～学びを通して、問い、聞き、語り合う～

① <12の問い>の性格

② <12の問い>まとめのポイント

<めざすもの>

Ⅴ. 「連研」は運動！～あるべき教団をめざして～

「連研」の原点は運動です。門徒推進員とともに御同朋の社会をめざしましょう。

VI. これからの「連研」！～門信徒と僧侶がともに～

「連研」から生まれてきた課題と方向性。次代を担う連研スタッフへ！

(4) 『連研ノートE [改訂版]』を使用するうえでの課題

- ご親教「念仏者の生き方」から学ぶ基礎学習プログラムと話し合い法座は結びつくのか

『今回の改訂に伴って「連研」のプログラムを見直し、新たに基礎学習の時間が設けられています。これは従来多くの組連研で、門徒必携や勤行聖典、あるいは独自資料を作成して、はじめて仏教を学ぶ参加者のために話し合い法座に先立って短時間の基礎学習の時間が取られていたことに対応したものです。今後の「連研」では、今まで以上にお寺に縁を持たなかった方の参加が増えることを期待して、この基礎学習の時間で活用していただけるような、ご親教「念仏者の生き方」に基づいたプログラムを作成し、お勤めや、荘厳作法とともに、基礎学習の時間が話し合い法座の内容に結びつくことをねらいとしています』

(『連研ノートE —スタッフノート— [別冊]』より 下線は引用者)

▶連研ノート検討部会員(当時)の声…「リンクさせるには無理がある」「現場で工夫をして下さい」「そもそもこの基礎学習プログラムを使用するかどうかは自由。使用しなくてもよい」

まとめ(林の私見)

「基礎学習」と「話し合い法座」はその「問い」の立脚点が違う。「基礎学習」で習得する知識に関しては、「問い」に対して一定の「答え」が存在する。「話し合い法座」における「問い」(12の問い)に対しては、たった一つの正解など存在せず、「応え」の反復が続く。

ご親教「念仏者の生き方」を連研・連研ノートに位置づけたいとの総局の思惑から生まれた連研ノートE [改訂版]だが、翻弄されることなく、各組で連研の意義を確かめ合い、それぞれの連研の現場に即して開催方法やカリキュラムをスタッフ間で協議のうえ決定していけばよいと考える。『連研ノートE [改訂版]』は、あくまでも一つの見本に過ぎないのだから。

【付録】 これからの連研のカタチ（連研の意義は門徒推進員養成だけではない）

● 門徒推進員の養成は僧侶の養成

「なぜ門徒推進員が養成されなければならなかったのか」。それは門徒推進員が必要とされる教団状況があったからである。そこでは、門徒と共にあゆむことをしてこなかった僧侶のありようが問われた。連研は門徒推進員養成の場であると同時に門徒と共にあゆむ僧侶養成の場でもある。

● 課題を課題として受けとめ、その克服に向けて共に歩む仲間づくり

仲間づくりとは仲良しグループをつくることではない。おかしいことを「おかしい」と指摘し合い、弱音や愚痴も受けとめ合う「せめぎ合って、折り合って、お互い様」の関係。

● 「わが寺・わが門徒」という枠組み（なわばり意識）の打破

日常（家庭・地域・職場など）の現場で、一人一人が現状に安住せず、自らの行為に対して無自覚にならず、教団・寺院組織の囲いからも解放され、自主・自律（自立）的な生き方ができる門徒推進員（門徒）・僧侶になっていくこと。

● 組の活動（運動）の原動力、推進力につなげること（組活動の源泉としての連研を再評価する）

組の現場でこれまでの連研活動はどうであったかを検証すること。これから連研をとおして何を共通の課題とし、何を願いとしていくのか、連研は組の活動（運動）の原動力、推進力となり得るのかについて、僧侶・門徒の立場を越えて話し合うことが重要。

● 人と人がつながっていく、人と人をつなげていくしかけづくり

「現在の門徒と寺院とのつながりは義理としがらみとうわべだけのおつきあい」（ある門徒推進員の言葉）。人と人がつながるしかけとして、人と人がであい直していくきっかけとして。

● 「門徒推進員（門徒）という生き方」「僧侶という生き方」「念仏者という生き方」

を求めていくこと ※別紙 門徒推進員という生き方【理念】参照

● 教えに生きる門徒、僧侶になっていくこと

浄土真宗の門徒の家に生まれたから門徒、浄土真宗の寺院（住職家）に生まれて資格を取ったから僧侶というのではない。仏教、浄土真宗の言葉をたくさん知っているから仏教徒、真宗門徒、真宗僧侶というのではない。浄土真宗の教えに生きようとする人を門徒、僧侶というのである。連研をとおして、教えに生きるお互いになっていきたい。